

アドベンチャーレース日本代表、ポルトガル大会にチャレンジ!

日本代表(チーム・イーストウインド)がワールドシリーズ・ポルトガル大会に出場!

文: 山本謙吾 (チーム・イーストウインド) 撮影: 柳澤健介



2010年11月20日から24日の5日間、アドベンチャーレースの日本代表(チーム・イーストウインド)はワールドシリーズの最終戦、ポルトガル大会に出場した。

1994年、サレントの湖で日本人が初めて参加してレイド・ゴロウ方式に挑戦し、そのときメンバーの一人であった田中正人が、日本にアドベンチャーレースを広めようとして毎年立ち上げたフロンティア・イーストウインドである。

今回僕たちが参加したポルトガル大会は、リスボンを中心に、山岳地帯、海岸地帯を含む総距離3000kmのコース、総行程は10日時間以上に及ぶ、チーム編成は、男女混成の4人1組を基本だ。

今回のイーストウインドのメンバーは、キャプテンの田中正人を筆頭に、元々メンバーに経験豊富な内田孝志、今回正統メンバーになった新人の田中博美、そして学生である僕、山本謙吾が参加した。

複雑なルールに困惑、不安だらけの前夜。

レース前日、競技の規則をたどると、世界各國から多くのレーサーが集まっていた。競技場のローロツバ公園から参加するチームが多く、アジアからの参加者は、僕らイーストウインドのみだ。

今回のレースは、コースが4つのステージに分かれている。ステージごとに配られるマップを手がかりに、指定の標目をこなしながら、できるだけ多くのチェックポイント(チェック)を回ってポイントを獲得するという形式だ。しかし、これに複雑なルールが伴う。それぞれのステージ

はアドベンチャーレースのルールをたどる。

What's Adventure Race?

自然相手の過酷な戦い、アドベンチャーレースって何?

山、川、湖、砂漠などあらゆる自然を舞台にした超長距離のアウトドアレース。複数の選手で構成されたチームが協力し、与えられた地図とコンパスを頼りに、トレッキング、ハイキングなど多様なアクティビティをこなしながらゴールを目指す。マラソンやカヌー、カヤック、フットボール、アスランズを題材とした動画記事のジャンル

ール・フェジュー氏が「もっと自然や人びとよった競技を」と考案。1989年にニュージーランドで開催されたレイド・ゴロウズが世界最初のアドベンチャーレース。現在はその流れを汲んだ「レイド・シリーズ」や、より競技志向の強い「ワールドシリーズ」が開催され、各地の競技場を巡りながら開催されている。



山中健太 2011 大会 初の日本代表
マラソンやカヌー、カヤック、フットボール、アスランズを題材とした動画記事のジャンル



山中健太 2011 大会 初の日本代表
マラソンやカヌー、カヤック、フットボール、アスランズを題材とした動画記事のジャンル

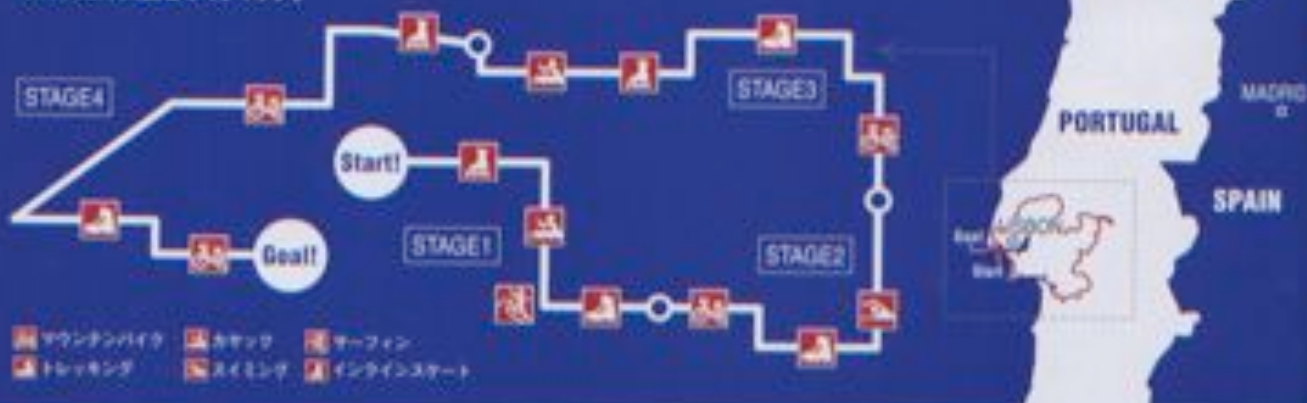


山中健太 2011 大会 初の日本代表
マラソンやカヌー、カヤック、フットボール、アスランズを題材とした動画記事のジャンル



山中健太 2011 大会 初の日本代表
マラソンやカヌー、カヤック、フットボール、アスランズを題材とした動画記事のジャンル

How Hard It Was!!! ポルトガル大会ざっくりマップ。



はアレスタンクスエロアで決まられて
おり、そこを山道で走り抜けるのは想定
されている。先陣のトランジション
(山道に走り抜ける)と、ピエタ
「高橋を走らせて、ドロップアウト
(両方ができる)の2種類の行動を
想定されている。アレスタントとの
距離はアレスタンスエリアを過ぎ、
標高が下がっている。海外で
のレース経験が豊富な山中さん、
こういったルートの複雑なレースは
初めてだということだ。各チームが
互いに競争し、主催者の説明は、
いまいち要領が通らない。
「その夜、僕らのチームがアレスタン
ト、カヤックに出かけた。レースは全
くの素人、英語も話せない彼を
前に、またびと不安定な船に乗った。
複雑なルート、素人のアレスタント、
それらに打ち勝つための準備に一晩
費やし、睡眠不足、多くの不安を踏
まえたままスタートすることになる。

**睡眠不足をおして
とにかくスタート!**

11月30日、午前10時、いよいよレ
ースはインラインスケートからスタ
ートだ。
「最初はゆるいのにいいよ、準備はす
まらぬが動きやすいから」と山中さ
ん、平常心を心掛け次のシーカヤック
へ。まずはチームの一人が沖にある
アイを渡つてくる。山中さんが行
き、僕はインラインスケートを外
して、ゆるやかな準備をする。戻
つた山中さんがカヤックを受け、2
人のカヤックに分乗して、滑り始める。
この時点で僕らはまだ休まず、先
行するチームを前に追い上げてい
た。インラインスケートの競走から

消費する体力に、 暖いがかかる暖房。

腹を通過する時に、明るいカファ
が見えた。店の中では、暖かい格好

裏に20度は下り、キーンと河に
沿ってリスボン側の街が見えてきた。
チエックポイントを通り、海岸のイ
ンラインスタートへ向かう。だが、
カヤックに穴が開いていたようで、
今夜は他のチームから離れに追い上
げられた。彼らのカヤックは搭載さ
れているバッグが水に付いたまじりの
気になる。セフは、次のトレマケン
ダの船場も確保が必要があったのだ。
この次のトランジションは、なんと
ドロップのみの設定だったのだ。昨
日主催者に口頭で質問した時はドロ
ップ後セフのトランジションだとい
う答えが返ってきたので、僕はこ
こで休憩するつもりだった。まさ
かウェットスーツのまま50km走れ
ると。スタートに前の奇り、近づくに
停めてあったアシスタントカーにア
タセさせてもらい、気を取り直して、
トレッキングギアスタート。しほ
らく健脚路を走る。徐々に進むが、
トランジションのトランクルで、かな
り船場が狭まってしまった。しかし、
ペースが崩れても構わない。この時点
の順位はまだまだあることになる。
ブッシュの中の静寂を羨み、明る
いうちにラゲージに荷物を、ここには
冬の日のほとどの水浴を泳いで通過す
る。それにしても、寒い。しひれる
ほど冷たい水浴をトランジションのウ
ェットスーツだけで一気に渡る。し
かしきりに冷たいのは、強風の中ウ
ェットスーツを脱いだ時だ。午後の
時にはあたりが暗くなり、ヘマドラ
イトをつけて進む。



【1】ドロップの直前です。ボルト方面、海軍から北西風が吹ける。リスボンの近郊、カスカイスに近くから見る海岸で、朝日の朝陽が射した。翌朝、海軍を見ながら休憩中。スタートまでにやらなければいけないことが多くあって、暇がない。海軍が仕事を終わる中、シーカヤックを積んだトランジションに乗りイーストラインド。海軍船場のそば、50mのカヤックセクションへ乗り込む。海が荒れ、この後リタイアするチームが出た。最終リタイアを覚悟したまま最後のラゲージを渡り、朝より早く出た。

全土大規模の人たちが集まっている
その後の通りも、無様な格好をした
外国人が散らばる中を走っている
のは、まさか奇妙な光景だったのだろう。
船場は賑わって来たような陽気さもなく、
「次のチエックポイントまでには船場
あろう」と途中さんがフォローし、船
場を走り、そして、風を助ける
船場を探し、運送のような船場の
壁の間に、4人固まって10分ほど休
みになった。
起き上がるも、突然、田中さんが
駆け寄ってきた。体力の消耗と全身
の疲労が感じられた。トレマケン
ダ終了まで50kmほど残っているし、
まだスタートしてからは時間も経っ
ていない。全行程100時間のレ
ースでは、まだまだ余裕なのに、
僕はチームを引っ張っているキャ
プテンが動けなくなるといふ、今ま
でにない状況に陥った。これはと具
いペースでは、精神的な部分が必要
に大きな差をひく。自分たちの
力に少しも疑いがなければ、そこ
から人間は簡単に動けるものだが、
不安を白にしては仕方がない。もう、
ペースは崩れてしまっている。船状を
すべて受け入れるしかない。僕には
、とにかく前へ進むか、リタイア
の選択しかないのだから。
その後、カフェの前を通った時に
暖かいミルクを飲み、少し腹を乾か
し、なんとまたトレマケンダを終え、
トランジションに帰った。ここで
少しまとまった休憩を取ら、濡れた
足からカヤックが冷たく感じない。
30分くらい先に走って船になった
だけだが、これだけでよいと回復
した。
次のトレマケンダをスタートする
まで、いいペースで夜の海岸線を走ら

ていけば、やっとなんかおぼえてきたという感じが、トレイルには選手の間でハットライトが通る。道の向こうには大きな面の旗がはらひらひらと見える。空には星が光っていてとてもきれいだ。

アクシデント発生、宮内さんが滑落!

次はクライミング。クラシオンが近づくと歩みながらギアを必要だけアタッシュから取り出していき、ここまでは固まっていたロープを引くように歩みながらロープを引くように歩みながらロープに一人という状態を保ってしばらくは歩ける。宮内さんが滑れば、地が滑るので、僕もついて、両者とも山中さんに先行してもらえ、が、戻る途中、再び山中さん、僕の目の前で宮内さんの腕が外れがれ、ヘッドライトが一回転するのがスローモーションのように見えた。

遭難、宮内さんはお尻から腰を痛打したままでも動きます。しばらく動かない。山中さんに彼女の場所まで戻ってもらい、僕は先に腰から上がった。ライトの電池を替えたりして待つが、なかなか上がってこない。降りきれなくなって再び戻ると、一歩も歩けない宮内さんがいた。彼女の腰に杖を打ち、みんなを助すつて進む。

この状態でレースになるのか、みんなが話していたところから、戻ってしまおうとそれが判断に及びそうでも歩むには思わなかった。とにかくアレスケンスエリアに着かなければ助産もままならないので、助産用のボムステーションを飲ませて、薬石で薬んだ、半歩の時間、ようやく明るい夜になり、星の光が明けた。



予選後に設置されたCP。最終レース中は24時間、常に4人が1組に回ります。暗闇の中で、一人で歩くと不安な状況、安心感とともに仲間同様に話し合えるなか、仲間同様に大きな声で励ましあいます。



「ステーションへ、宮内さんは大丈夫?」

ステーションが静か、アレスケンスエリアの体背筋に閉眼、目を閉じた瞬間のコースで、引換がかかってしまった。ここでもステーションのためには、水を補給し、食料を補給する。次の地点まで歩くが、トレックでも引換がかかるコースで、閉じた宮内さんがいつまでも待つことがない。

ステーションには人がずつに分かる。オリエンテーションのリーダーから、1組目の山中さん、山中さんのペアがコースのコースへ、手を握り合ってきたので宮内さんと僕は30分程度のショートコースへ、地図をきくと見たところ、小さな山を越えて、反対側の斜面に高低差に配慮された、CTを走るコースのようだ。最初は階段に配慮した宮内さんが地図を持ってたが、確実のショックが体力の限界か、簡単なはずでもお尻をかくに交代して、オリエンテーションは絶対に必要な道具である。歩いた間は簡単だったが、いくらかんでもペースが速い。

降り坂と宮内さんが話している。「ヤマキ、私でここにリタイアしてアレスケントをしようと思ってる」。スモール、リタイアして、アレスケントがいて、助ける人までレースを続ける。それが、僕たち二人にとって、次に助かるレースになるから、い、どうやら僕たちのチームは2日目にして、早速順路に立ちかけたようだ。

どのお名前、イーストワインで行き届くハッピー

